渡櫓

(1) 天守への入り口

1634 年に月見櫓ができるまでは、渡櫓の 1 階にある入り口が城への唯一のアクセス手段であった。入口の重厚な石段は、大天守と乾小天守を結ぶ廊下へと続いていた。現在、階段は安全性を高めるために手すりを含む木枠で覆われているが、これは一般公開が始まってから付け加えられたものである。

(2) 曲がった天井の梁

渡櫓の 2 階にある天井の梁のうち、1 本は元の木の形状を残したままになっている。これは、地震時に伸縮しやすいようにと考えられたものである。 彦根城や金沢城など、他の城でも同じような曲線の梁を見ることができる。

梁に取り付けられた小さな銅板には、松本城の保存活動の歴史が記されている。

展示品

渡櫓の 2 階にある小さな展示室には、1950 年代の天守の解体・復元時に取り外された瓦や釘などが展示されている。修理の際に屋根から剥がされた 84,672 枚の瓦のうち、22,396 枚が回収され、再利用された。

城主が屋根の修理をするたびに、自分の家の家紋を入れた瓦を使った。その結果、城の屋根の瓦には、さまざまな家の紋が並んでいる。

辰巳附櫓

(1)「消えた」石落とし

辰巳附櫓は外から見ると、石落としと呼ばれる防御施設と思われる張り出しがある。通常、この張り出しは底が開いており、防御者が弓や火縄銃を撃つことができる空間になっている。この場合、開口部は床板で覆われている。

この張り出しは、辰巳附櫓と月見櫓の壁を合わせるために、構造上必要なものであった。戦時に建てられたのであれば、石落としが設けられたのであろうが、17 世紀にはそのような防御的な機能は優先されなくなった。

(2) 戦時中と平時の柱

1603 年に徳川幕府が成立すると、比較的平和な時代が到来し、大名は常に侵略の危険に備える必要はなくなった。このような変化は、城の構造を戦時と平時で比較するとよくわかる。大天守と辰巳附櫓の間の敷居にはそれぞれの柱が並んでいる。辰巳附櫓の柱は攻撃に耐えられるような構造ではなく、大天

守の柱の約半分の太さしかない。

(3) 花頭窓と水切

辰巳附櫓の鐘楼窓は「花頭窓」と呼ばれるものである。中国発祥のデザインで、禅宗の寺院に多く用いられていた。この窓が次第に天守や武家屋敷に取り入れられるようになった。

窓辺には水切と呼ばれる開口部が設けられ、雨水が溜まって窓辺が傷むのを防いでいる。この水切は、雨水が小さなパイプを通って屋根に流れ出るようになっている。

展示品

辰巳附櫓の 2 階では、松本城鉄砲蔵赤羽コレクションの装備品を展示している。詳しくは収蔵品のページをご覧ください。

月見櫓

(1)無防備な櫓

月見櫓は、江戸時代（1603-1867）の平和な時代に増築された。そのため、旧来の天守のような防御機能は持たない。天守閣の 3 面には壁の代わりに木製の引き戸が取り付けられており、これを取り外すと本丸・二の丸と遠くの山々を一望することができる。床には畳が敷かれ、宴が行われた。

月見櫓は、徳川三代将軍・徳川家光（1604-1651）が善光寺参詣をする途中、この城に宿泊するために建てられたといわれている。しかし、家光は落石のため別の道を通り、松本を通過することはなかった。

(2) 船底天井と朱塗りの縁側

月見櫓には、戦時中ではありえないような優雅な演出が随所に施されている。例えば、塔の周囲には朱塗りの縁側があり、その角には緩やかなカーブを描く手すりがついている。また、船底天井は柿渋の染料で赤く染め上げられ、木が赤く輝いている。